自慢の母

玉名中学校３年　　森木　一響

「ありがとうございました。」
笑顔でそう言うと正面には屈託のないキラキラとした笑顔があった。その笑顔が目に入った瞬間、達成感や清々しさが一気に押し寄せてきた。隣には他のお客さんの注文を真剣に焼いている母の姿があった。母もこの気持ちを日々感じながら頑張っているのだろうか、そんな事を考えながら母を横目にお客さんが立ち去るのを見送る。そして再度忙しい仕事に戻る。仕事と言って良いのか分からないが私は少し母のお店を手伝っている。母は焼き鳥屋を経営している。お客さんが多い日に私は手伝いに行っている。閉店の時間になるともうくたくたで、足が棒になる。でもその時間になると母と今日の注文内容や最近の出来事をゆっくり話す事ができる。仕事の途中でも話したりするがやはりこうやって話すのが一番良い。疲れが取れる。私が後片づけをしている時、母は必ず伝票の売り上げを確認し合計の金額を出している。私はそれを疑問に思っていた。ある日私は何の税を払っているのかこの作文をきっかけに聞いてみる事にした。すると、思っている以上に払っている税がたくさんあって驚いた。まずは私も払った事がある消費税、次にその地域に住む人達が地域社会の費用を分担する住民税、さらに国の費用を分担する所得税、自動車の排出量に応じて課税される自動車税などがあった。その中でも母は普通の会社員とは払い方が違う税ががある。それは先程の住民税と所得税の二つだ。会社員の方々はお給料から引かれているが、母のような自営業をしている方々は自分自身で計算をしなければならない。金額の合計を出しているのはそのためなのかと、初めて納得した。こうやって一人一人がきちんと納めている事で私たちの生活が支えられ、安心安全に暮らせている事を改めて実感した。現在では人口減少や少子高齢化などにより、一人にかかる額が増加するなどの様々な問題があるが、私はそれに他人事と思わずしっかりと向き合っていきたい。母の事を知ってからはお客さんからお金を受け取る際、以前よりも感謝の気持ちを持つようにした。持った所で大した変化は無いかもしれない。けれど私はそうしなければと強く思った。私の見えない所でいつも頑張って生活を支えてくれている母が居るから。今でもあの忘れられない笑顔を見れる。やりがいを感じられる。私が誇る自慢の母だ。入れば感じる力強い熱気、いつも圧倒される。視界に入った大量の伝票。今日も忙しくなりそうだ。いつも通りお客さんが来て下さる。ありがたい事だ。
「ありがとうざいました。」
笑顔でそう言うと正面にはまた屈託のないキラキラとした笑顔があった。私の大好きな笑顔だ。今日はいつもよりその笑顔がなぜか優しく、輝やかしく見えた。目にこびりついて離れないくらいに。